

国際機関への就職とSFCでの教育

司会の八木先生、ご指名とご紹介をいただき、ありがとうございました。そして、将来、公務員や国際機関の職員になることに関心を寄せてここに集まれた学生のみなさん、こんにちは。

SFCへ入学しようとする学生諸君にとっては、国際機関へ就職したい、という希望を持つ諸君が極めて多いのが特徴的です。例えば、AO入試の面接試験で将来希望する進路についての質問した場合、「国際機関へ就職したい」あるいは「ジャーナリストになりたい」という答えが最も多く、これら二つの回答でおそらく半分以上を占めるように思います。その一方、四年生の就職先決定リストをみると、卒業直後にそうした職に就く諸君はほとんど見当たりません。

こうしたギャップは、どこから生じるのか。それには種々の理由がありますが、本日は、そうした希望と現実の差異に理解を深めていただくとともに、ここに参集された学生諸君が希望を実現するうえで多少とも役立つようにと考え、公的機関ないし国際機関の仕事とそこへの就職問題に関して、特に国際機関に重点を置きつつ、やや実践的なお話をすることにします。

以下では、まず国際機関・公的機関の実例を挙げるとともに私の経験を紹介し、次いで国際機関における仕事の性格と特徴、国際機関の職員に求められる資格要件を整理してみます。そのあと、SFCで教育を受けた学生の強みと弱みを述べ、最後に、国際機関で就職内定を獲得するためのヒントを提供することにしたい。

国際機関・公的機関の実例

国際機関といっても、多種多様なものがあります。一般によく知られたものとしては、まず国際連合（United Nations, UN。本部はニューヨーク）があります。また、その外にある専門分野の独立国際機関としては、ユネスコ（国連教育科学文化機関、United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization、UNESCO。本部はパリ）、ユニセフ（United Nations Children's Fund、UNICEF。本部はニューヨーク）、ILO（国際労働機関、International Labour Organization。本部はジュネーブ）、WHO（世界保健機関、World Health Organization。本部はジュネーブ）などがあります。そして、WTO（世界貿易機関、World Trade Organization。本部はジュネーブ）も、最近よくジャーナリズムに登場しています。

さらに、経済関係で比較的なじみ深いものとしては、IMF（国際通貨基金、International Monetary Fund。本部はワシントン）、世界銀行（World Bank。本部はワシントン）、OECD（経済協力開発機構、Organization for Economic Cooperation and Development。本部はパリ）、BIS（国際決済銀行、Bank for International Settlements。本部はスイスのバーゼル）、アジア開発銀行（ADB。本部はマニラ）などがあります。

一方、日本国内の公的機関としては、中央政府や地方政府を別にすれば、日本銀行、日本政策投資銀行（旧日本開発銀行）、国際協力銀行（旧日本輸出入銀行）、国際協力事業団（Japan International Cooperation Agency, JICA）などが、比較的考えやすい就職先でしょう。

私の経験

SFCの教員になる前、私自身、公的機関の一つである日本銀行で、二〇年以上にわたって色々な仕事をしていました。このため、公的機関における仕事の進め方やその性格について、一応のことは体験し、また理解しているつもりです。また、日銀の同僚で色々な国際機関（IMF、世界銀行、OECD、BIS、ユニセフ、アジア開発銀行など）に派遣された者も少なくありません。一方、それら機関で派遣職員としてではなく専従職員として働いている知人も、外国人を含めて何人かあります。このため、彼らがそこでどのような仕事をどのように取り運んでいるかについて、これまで色々なことを聞く機会がありました。また、日銀在任中には、仕事の関係で私自身がIMF、世界銀行、OECD、BISなどでの会議に出かけたり、それらのスタッフと議論したり、あるいはそこでの勤務状況を見たり聞いたりする機会もありました。

さらに、約二〇年前になりますが、私自身、OECDの職員採用試験のためにパリの本部まで出かけ、そこで筆記試験と面接試験を受けたこともあります。その時には、一応合格しましたが、色々な事情によりOECDの勤務を見送った経緯があります（OECDのかわりに日銀ロンドン事務所で勤務することになりました）。

このように、国際機関の職員として直接働いたという経験はこれまでになかったものの、公的機関での職務経験は二〇年以上にわたり、また色々な国際機関やそのスタッフと接触する機会もこれまで少なくありませんでした。以下では、こうした経験をもとに、私の理解するところをお話します。

国際機関における仕事の性格と特徴

公的機関や多くの国際機関での仕事に共通していることは、三点に要約できると思います。

第一に、そうした機関の機能、そしてその職員が手掛けている仕事は、ほんどの場合、いわば定義上、国内あるいは世界に一つしかない仕事（機能）だといってもよいことです。日本銀行という組織の持つ様々な機能は、日銀以外にはありません（学界には複数の中央銀行を競争的に存立させるのが望ましいという学説もありますが、世界のどこを見渡してもそれを実施している例はありません）。また、国連であれ、IMFであれ、同様の機能を持つ組織は、これら以外にはありません。これは、民間業種と基本的に異なる点です。例えば自動車の生産に関しては、国内でトヨタ、日産、本多技研などがあるだけでなく、海外にもGM、ベンツなど多くの同業者があり、この点で対照的といえます。

今日の社会は、公的部門と民間部門がそれぞれの役割を十分に果たすことによって、全体として望ましい方向に向かう仕組みになっています。このため、公的機関の機能に独自性があるからといって、その職員の仕事が、民間におけるそれよりも高貴である、などということを意味するわけではありません。ただ、仕事の性格にそのような独自性がある点は、仕事として見た場合、一つの魅力といえましょう。

第二の特徴は、第一の点と密接に関係しており、また自明のことかもしれませんが、それらの仕事は特定の利害あるいは利益のための仕事ではなく、公共の利益のための仕事であることです。この点もまた、官民の役割分担の観点からいえば、仕事の優劣

を意味するものではありません。しかし、実際に手掛ける仕事が、公共の利益に直結しているという点では、やはり公的機関や多くの国際機関の仕事の大きな魅力です。だから、就職先としてそれらが選好される理由は、十分理解できるところです。

第三の特徴は、仕事のうえで中心となる調査書や企画書の作成において、そのドキュメントが単に分析的である（色々な分析レベルがありますが）だけでなく、必ず政策的なメニューが提示されるとともに、各選択肢の性質や帰結の分析を伴ったものであることが求められることです。学者の研究では、政策的含意を記述することは従来要件とされていません（現に大半の学術論文ではそうした記述が欠落しています）が、公的機関での仕事は、ほとんどの場合、調査・分析・企画が一体となっています。つまり、色々調べたり、研究したりした結果、それが何らかの政策提案（あるいは行動）に結びつくことが不可欠になるわけです。

国際機関の職員に求められる資格

では、そのような仕事をする上で求められる資格要件は何か。国内の場合と国際機関の場合で異なる面もありますが、ここでは国際機関の職員に求められる一般的な資格を三つプラス一つ（合計四つ）挙げておきたい。

第一には、最も基本的な条件であるが、特定の分野において高度の専門的能力（professional skill）と経験を持っていることです。具体的には、たいていの場合、単に学部卒業ではなく大学院レベル（少なくとも修士学位、たいていの場合は博士P h . D .の学位）の修了、または数年（場合によっては五年以上）の実務経験のいずれか、ないし両方が応募の前提条件とされます。

第二には、口頭および文章による高度な伝達能力（communication skills。論文執筆能力、プレゼンテーション能力、説得力、交渉力）を持っていることです。国際機関は、多様な価値観や文化的背景を持ったスタッフによって構成されているので、以心伝心で仕事が円滑に取り運べることを期待するわけにはゆかず、あくまで二つの共通の「ことば」ともいえるスキル（技能）が仕事上基礎になります。すなわち、一つは論理（ロジックを基礎とする伝達・説得）であり、もう一つは英語（によるコミュニケーション）です。なぜなら、国際機関での日常の仕事においては、英語によって論理的な文章を書く（そうすることによって上司や関係者にその内容を伝える）という作業（drafting）が中心になるからです。

第三には、特に経済開発など多くの要因がからんでくる仕事の場合、一つの学問分野の勉強だけではなく、いくつかの学問領域を学んだ経験（multi-disciplinary background）が要求されることです。その一例としては、アジア開発銀行のウェブ・サイト（<http://www.adb.org/> のスタッフ応募要件）を見てください。こうした資格が求められるのは、政策判断をする場合には、たいてい多様な専門的視点が欠かせない、ということに由来します。

そして第四には、通常の募集要項に記載されていることではありませんが、私としては、思いやりの心を持っていること（consideration）を追加的要件として挙げておきたいと思います。確かに、国際機関のスタッフには、論理一本やりで攻撃的に議論するというタイプが少なくなく、それはそれで筋の通るビヘイビアになっています。ただ、それだけが行動原理というのでは、人間としてややさびしい。また、相手

の考え方や立場にも思いやりを持つという姿勢には、それ自体意味があるだけでなく、結果的に説得や交渉を容易にする面もあるように思います。

S F Cで教育を受けた学生の強みと弱み

以上のような要件に照らした場合、S F Cで教育を受けた学生諸君は、他の大学生にない幾つかの強みを持っています。

第一に、政策指向の発想です。S F Cでは、色々な分析をするにしても、最終的には何らかの政策的含意を導かねばならない、という教育方針が採られています（少なくとも私の研究会ではそのことを研究報告書の大きな条件としています）。これは、まさに公共機関や国際機関の仕事における発想そのものであり、他学部の卒業生に比べて大きな優位を持っています。第二に、表現・伝達能力に優れることです。S F Cの学生は、英語ないし少なくとも一つの外国語を集中的に勉強するシステム、さらに発表能力（OHPやディスプレイなど各種機器の日常的利用も含む）や討論能力を高める授業方法、などにより幅広いスキルを身に付けていると期待できます。そして、これらの技法とその重要性を、国際経験豊かなS F Cのスタッフ直接学んできていることは、とても大きな資産になると思います。そして第三に、他の専門学部とは異なり、複数の学問領域を学んだ経験を必ず持っていることです。

一方、S F Cの学生諸君について一般的にいえる弱点は、特定の学問分野（例えば経済学、政治学など）についての深い勉学と知識が、他学部の卒業生に比べて一般的にいつてもどうしても見劣りがする、という点でしょう。学部学生として勉学できる期間が四年間と限られている以上、これには、ある程度やむを得ない面があります。S F Cの学生にとって専門の深い勉強は、むしろ卒業後の大きな課題として考えておくのが適当でしょう。

国際機関に入るには二つの道

では、国際機関に就職するにはどうすればよいか。以上の話からわかるように、S F Cを卒業し、その後直ちに国際機関に就職する、という道は残念ながらありません。従って、将来、国際機関で働くことを希望するのであれば、より長期の戦略を立てることが必要になります。その場合、道は二つあります。

一つのルートは、前述した条件を順次整えたうえで、プロフェッショナルとしていけば正面から国際機関の採用試験に応募する方法です。このためには、いまから一〇年後くらいまでの期間にわたる自分自身のキャリア開発計画を、今から立てておく必要があります。つまり、S F C卒業後、どういう勉強ないし経験を積むことによって前記の条件を充足させていくかを、いま具体的に計画することです。

例えば、世界銀行を志望する場合、大学院に進学してまず修士号を取得すれば、世銀には若手対象のインターンの制度（young professional program）があるので、それを利用して世銀で実務経験をしてみる道が用意されています。最終的には博士号（Ph.D.）を取得するにしても、そこに行くまでの勉強スケジュールの中に、こうした経験をうまく組み込むことも可能であるわけです。

もう一つのルートは、まず日本国内の官庁ないし公的機関に入り、そこで数年間仕事の経験を積んだ上で、そこから国際機関に派遣される道を探る方法です。これはい

わば間接的な方法です。日本の多くの省庁や公的機関は、たいてい関連する国際機関への派遣ポストをいくつか持っているため、この方法は比較的实现させやすい面があります。ただ、このルートで国際機関に入る場合、学位の条件などは確かに正規専任職員の採用の場合ほど厳しくありませんが、派遣はたいてい数年間にとどまるものであり、永続的に雇用されることが約束されるわけではありません。

目標実現に必要なこと

これら二つのいずれをとるにしても、諸君にとっては、極めて長期にわたる戦略にならざるを得ないことがお分かりいただけたと思います。現実には、まさにその通りです。因みに、先年、世界銀行の採用人事担当の方がSFCを訪問され、学生諸君に対して世銀への就職説明会を催したいというのでそのアレンジをお手伝いする機会がありました。その説明会で示された学生諸君への基本的なメッセージは、二つありました。第一は、SFC卒業と同時に世銀に就職する道は残念ながら存在しない、第二は、しかしながら世銀を目指した一〇年計画を立てることにより、SFCからも優秀な学生が世銀に入ってほしい、というものでした。

国際機関への就職希望は、当然ながら世界全体から数多く寄せられるわけであり、従って実際に採用されるには、極めて厳しい競争の世界を通り抜ける必要があります。例えば、前述した世銀のヤング・プロフェッショナル・プログラムでは、毎年四十五ないし五〇人が採用されていますが、これに対し世界中から毎年六千人を越える応募者があるとのこと。だからといって、ひるむ必要はありません。

ほんとうに国際機関に就職を希望するのであれば、私は具体的提案を三つしたい。第一は、関連する「情報袋」（それは切り抜きを入れる使用済みの大判の封筒、スクラップブック、あるいはコンピュータ上のファイルなど適当なものでよい）をいまずぐに作り、関連情報をこれから継続的に入れていくことだ。第二に、現在の任務（ほとんどの諸君の場合は勉強）に死ぬほどの力を注ぐことだ。そして第三には、国際機関への就職という希望、あるいは夢を持ち続けることである。

夢は、持たないと実現しません。また夢は、私の経験からいっても、持ち続けることによっていずれ必ず実現するものです。諸君の決意と今後の努力を期待し、そして幸運を祈ります。

(SFC・シビル・サービス・オリエンテーション・プログラム委員会
主催の公務員ガイダンスでの講演、二〇〇〇年六月七日)